

増加する外国人子女の保育の現状と課題

その2: 保育現場の受け入れの諸問題

○大場幸夫 民秋 言 中田カヨ子 久富陽子
 (大妻女子大学) (白梅学園短大) (東京成徳短大) (日本児童教育専門学校)

1. 目的と方法

本論は、上記主題のもとに連番で発表される「その1: 入所の実態について」と関連する研究活動の第2報にあたる。本論は主として“保育現場の声”に耳を傾けることによって、「受け入れの諸問題の検討」への示唆を得ることを目的とする。保育者を対象にした諸問調査用紙を作成し、①入所当初の子どもの様子 ②当時の子どもとの出会いの心証 ③当該乳幼児の園生活の経過 ④保護者とのかかわり ⑤印象に残るエピソードなど、12問を設定し、いずれも自由記述形式で回答を得た。園長を除いて、保育者(担任)の回答数は342。これらの回答を研究グループで精読し合った。結果の傾向と保育研究上留意しておきたい内容を重点的に取り上げて考察するように、討議の過程を方向付けた。その結果、当面の問題の所在とその対応等に関する若干の示唆を得たことを、次項で述べる。

2. 結果の考察

(1)子どもたちの順応性のめざましさ

保育者を対象にした自由記述式質問紙調査の結果のうち、子どもに関する回答では、保育者の関心はことばと、衣食に関する生活習慣の領域に向けられていることがわかった。ここでは特に「ことば」に留意して検討する。前述のように、全体の比率からすれば入所時年齢が乳児期の事例の多いなかで、特に年中・年長クラスの子どもの場合には、意思疎通の上でやはりことばの面の不自由さと必要なことを的確に伝達できにくい歯がゆさを指摘している例は少なくない。保母の側だけではなく、子どもの問題としては、思うように自分の気持ちを日本語という“外国語”で表現することの困難さを感じている彼らへの援助に苦心する。そのように、“ことばのハンディ”という人とひとのかかわりを疎外させる危険のある根本的問題であるのに、実際の回答を読んでみる限り、必ずしもそのことが大きなかかわり障害になっている様子を感じさせない。少なくとも保育者と子どもたちとのかかわりにおいては、ことばの通じ合えないことの歯がゆさは事実であるとしながら、他方では園生活が楽しく展開されていく様子を描いてくれる例が多い。

『レコードや体操が大好き、ことばはわから

なくても楽しそうに踊っていた。音楽には国境はないのだなと感じさせられた』

周りの子どもたちと保育者と当の子どもが、ことばがなくても通じ合えるかかわりを形成してきた事実を指摘する。そのなにげなさ、自然さに、日頃われわれが「園生活」と呼んできた保育実践のもつ重みを感じさせられる。

『わずか4ヶ月の間で、日本語の上達は驚くほど。子ども同士のかかわりがうまくいくと、こんなに変わってくるのだなと感じた』

子どものことばの学習はめざましい。比較的年少時に入所する例の多いことが今回の調査でわかったが、保育者の回答では、乳児の時期から園生活に馴染んでいく過程で、ことばの“障害”は問題にならないという報告が多い。つまり日本の子どもと変わらず、乳児一般の問題として援助する必要性をもつという共通項のなかの問題として受け入れている傾向が強い。敢えて「外国人子女の保育」という問題の扱いさえ不自然ではないかという意見もあったほどである。保育者のこの問題に対する意識は、当の子どもたちが園生活に馴染んでいくことの早さにも、さほど日本の子どもと大きな差が感じられないという経験から、これといって特に問題にするようなことはない、と回答してきた例が少なくない。園生活への適応に問題がないのであり、なんら日本の子どもと変わった特別の対応が必要なものではない、という感想なのである。この点、子どもに関する保育者とのかかわりは本当に順調にいくことを安心して指摘していい。

(2)親との意思疎通の難しさ

しかしながら、他方では、子どもたちの乳児期からの入園は、その時期の子どもの保護者とのかかわりにおいて難しい問題を抱えていることが明らかにもなった。保育者の回答をまとめると、次のようなコメントになる。

『日本語のほとんどわからない親の場合、子どもが小さいほど、言葉の問題は大きい。』

保育者の側でも親の側でも、肝心の子どもの状況をより詳しくお互いに知りたいのに、確認するための手だてとなるべきことばが不自由で、相互理解のかべにな

る。“外国人”にとって、また保育者自身にとっても、ことばのハンディが悩みであり、その点が予想されたように保育者の問題とするところの一番指摘の多いものであった。この点について具体的には、特にことばが通じにくいために親との連絡上の意思疎通に不自由すること、そのためのめめ事やごたごたさがおきていることを指摘している。例えば

『説明すればわかったとあって、実際はわかっていていなかったり、わからないふりをして、自分の都合のいいように話を変えてしまう』

『簡単な言葉、例えば一生懸命ってどういふこと、流行性ってなに？と、一言ひとことに説明が必要で、思うように伝えられない歯がゆさ』

このような回答が、保育者と子どもとの関係における順調さとは異なる心証として、親とのかかわりの難しさを実感していることを示している。それだけに、また心が通い会えたときには、お互いの喜びはひとしおの感慨を覚えている様子が見えてくる。その問題は担任の問題であるだけでなく、前の第一報にも触れているが、園長や役所の関係者にとっても、入園の手続きの段階からすでに“ことばの障害”があった。保育の関係を保護者と保育者のとの間で的確に相互の理解をしようためには、やはりことばのカベは無視できない。すんなりと意思の交流が可能なら問題はないが、問題の生ずる原因がことばのカベであることが現実の保育の実践のさなかでおきてくるエピソードをみると、そのカベの克服へのなんらかの手だてを講ずることを検討する必要がある。必要な情報の的確な伝達を可能にさせる手だてに関して、保育者の切実な声は、特に病氣やけがのように緊急性のある事態への対応、あるいは通常的には園生活上の事務連絡の伝達、という面で顕著である。保育者自身が園児の家庭での常用語をマスターしようと辞書を片手に懸命に意思を伝えるため努力をすることで親に誠意が伝わり、ことばはともかく、保育者の気持ちが伝わって交流の契機となっているという類の例は少なくない。(この点では、保育者の個人的努力のみに任されているという現実でもあるという強い印象をわれわれは受けている。受け入れのネットワークに言及した回答は全くないのである。)親の日本の滞在についての見通しによっても意思疎通は異なっている。つまり日本に長期に滞在する方針で仕事だけではなく、家庭生活の設計を“郷に従う”姿勢である場合には、行事の一つ、日常生活の折々で興味

関心を募らせて積極的に参加する姿勢がある場合には、ことばのカベも決して克服困難ではない。

(3) 保育者の「内なる国際化」

保育者の回答では、こどもの成長の共通性、つまりどの国の子どもと同じという心証を語るものが多かった。そのことが、子どもの受け入れにとって大きな前提であることは間違いないことである。しかしそこにはまた、その実感のなかに見失う恐れのある「異文化との交流への関心」に留意する必要がある。たんに子どもが園の生活に合わせる事が早い遅いか、という保育者側の一方的な関心だけではなく、むしろ保育者も他の子どもたちも、よその国からやってきた友達の生活世界に関心をもつこと、交流をはかるチャンスにすることに積極的になること必要であり、願ってもないチャンスではないのだろうか。子どもとその生活世界が同質であること、異質であること、そのどちらがいいとか、正しいかという論議ではなく、その双方が発達理解、生活理解の留意点を示したのとして大事である。しかも、その子たちがそれぞれの国の将来の担い手になるという点では、園の生活にすんなり順応させることが唯一の方向ではないだろう。その意味では、親と保育者の間での保育実践に対する認識の違いが問題になるはずだ。その違いの中に、子どもの生きていく未来に対する配慮が、いまここでの保育実践においても認識されるべきことであるといえよう。保育者の内なる国際化とは、こうした外国人家庭の子どもと保護者との出会いを通して、自らの異文化接触の経験を活かしていく自覚的な姿勢がつけられるかどうかによる。

(4) 今回の調査のまとめと展望

第1報で、入所時年齢は調査対象の約7割が乳児であること、子どもの在籍年数は1年未満が全体の4割を占めること、国籍や親の職業は多様であること、行政の役割への期待が強いこと、保育者と行政の衝にある人との連携の必要性、援助体制の工夫が必要であること、などが確認された。また本報では、保育者の回答から、これらの子どもたちの園生活へのとけ込んでいく様子や、それを懸命に支えてきた保育者自身の様子も読み取ることができた。入所後の援助が全く園長や担任など保育者の個人的な努力に任されていることが強く印象づけられたこと、を指摘したい。

本研究では、さらに保育内容に関する具体的な問題を取り上げつつ、検討をつづけている。当面の課題は、今回の保育者からの回答をさらに吟味すること、事例的に追跡すること、幼稚園入園の実態を調べること、海外の研究者との情報交換を進めること、などである。